

「満州経済整頓された知性」

横光、現地誌にエッセー

昭和19年寄稿



横光利一

新感覚派の旗手、作家横光利一（一八九八一—一九四七年）が、旧満州（中国東北部）の雑誌に寄せた珍しいエッセーが見つかった。敗戦の直前、一九四四（昭和十九）年に内地で書かれたとみられ、変ぼうを遂げる満州の未来に希望を見いだし

ている。横光の晩年の心境を知る貴重な資料だと注目されている。エッセーは「ある夜の拍手」と題された約五千二百字の作品。タイトルは、三〇年に大連で講演した時、聴衆の一人から長い長い拍手を送られた思い出から採っている。雑誌「芸文」四四年九月号に掲載されていた。「芸文」の復刻にあたっては鈴木貞美・国際日本文化研究センター教授が、中国の研究者からコピーを取り寄せたところ、全篇などに未収録で、日本の研究者には知られていない作品だと分かった。その中で横光は、南満州鉄道（満鉄）の招きで作家菊池寛らと訪れた三〇年と、欧州帰りに一人で立ち寄った三六年度の二度の満州旅行を回想。原野が開かれ、どんどんと工業化されていった満州について「生まれましい紀元の地、創生の夜明け」などとつづいている。欧米の資本主義経済と比べながら、満州の経済は「よく整頓された知性」でコントロールされているなどと評価している。鈴木さんは「横光は金銭に狂奔する欧米の資本主義に批判的だった。近代の価値観を乗り越える可能性を満州に見ていたのではないか」と話している。

2009 8/14 東京新聞 (朝刊)

「芸文」旧満州で発行された月刊雑誌。1944年1月、満州文化人らで作られた官営組織「満州芸文連盟」が創刊した。初代編集長はプロレタリア作家山田清三郎。発行は後に、当時の文芸春秋が満州に作った子会社「満州文芸春秋社」が引き継いだ。終刊時期は不明。原本が失われている号もある。現在、ゆまに書房（東京）が復刻版を刊行予定。

ある夜の拍手 横光利一

雑誌「芸文」1944年9月号に掲載されていた横光利一のエッセー（コピー）。右は同年7月号の実物（日本近代文学館蔵）